

着物

芥川龍之介

青空文庫

こんな夢を見た。

何でも料理屋か何かからしい。広い座敷に一ぱいに大ぜい人が坐つてゐる。それが皆思ひ思ひに洋服や和服を着用してゐる。

着用してゐるばかりぢやない。互に他人の着物を眺めては、勝手な品評を試みてゐる。

「君のフロックは旧式だね。自然主義時代の遺物ぢやないか。」

「その結城は傑作だよ。何とも云へない人間味がある。」

「何だい。君の御召しの羽織は、全然心の動きが見えないぢやないか。」

「あの紺サアヂの背広を見給へ。宛然たるペツティイ・ブルジョアだから。」

「おや、君が落語家のやうな帯をしめるのには驚いた。」

「やつぱり君が大島を着てゐると、山の手の坊ちやんと云ふ格だね。」

こんな事を盛に云ひ合つてゐる。

すると一番末席に、妙な痩せ男のゐるのが見えた。その男は古風な漆紋うるしもんのついた、如何いかがはしい黄びらを着用してゐる。この着物がどうもさつきから、散々槍玉に挙げられてゐるらしい。現に今も年の若い、髪を長くした先生が、

「君の着物は相不変遊んでゐるぢやないか」と喝破かつぱした。

その先生はどう云ふ氣か、ドミニク派の僧侶じみた白い法服を着用してゐる。何でもこんな着物はバルザックが、仕事をする時に着てゐたやうだ。もつと尤も着手はバルザック程、背も幅もないものだから、裾が大分余つてゐる。

が、痩せ男は苦笑したぎり、やはり黙然と坐つてゐる。

「君は始終同じ着物を着てゐるから話せないよ。」

これは銘仙だか大島だか判然しない着物を着た、やはり年少の豪傑はふが抛りつけた評語である。が、豪傑自身の着物も、余程長い間着てゐると見えて、襟えり垢あかがべつとり食附いてゐる。

それでも黄びらを着了た男は、何とも言葉を返さずにゐる。どうもその容子を見ると、よくよく意久地のない代物らしい。

所が三度目には肩幅の広い、縞しまの粗い背広を着た男が、にやりにやり笑ひながら、半ば同情のある評語を下した。

「君は何故この前の着物を着ないのだい。それぢや又逆戻りをした訳ぢやないか。しかし黄びらも似合はなくてはなないよ。——諸君この男も一度は着換へをして出て来た事を思ひ出

してやり給へ。さうして今後も着換へをするやうに、鞭撻べんたつの労を執つてくれ給へ。」

大ぜいの中には「ヒイア、ヒイア」と声援を与へた向きもある、「もつと手厳しくやれ、仲間褒めをしてはいかん」と怒号する向きもある。

瘦せ男は頭を掻きながら、匆々そうそうこの座敷を退却した。さうして風通しの悪るさうな、

場末の二階家へ歸つて来た。

家の中は虫干のやうに階上にも階下にも、いろいろな着物が吊り下げてある。何か蛇の鱗うろこのやうに光る物があると思つたら、それは戦争の時に使ふ鎖帷子くさりかたびらや鎧だつた。

瘦せ男はこの着物の中に、傲慢がうまん不遜ふそんなあくらを掻くと、恬然てんぜんと煙草をふかし始めた。

その時何か云つたやうに思ふが、生憎眼あいにくのさめた今は覚えてゐない。析角夢の話を書きながら、その一句を忘れてしまつた事は、返す返すも遺憾である。

青空文庫情報

底本：「芥川龍之介全集 第九卷」岩波書店

1996（平成8）年7月8日発行

入力：もりみつじゅんじ

校正：松永正敏

2002年5月17日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

着物

芥川龍之介

2020年 7月17日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>